

清水幾太郎著

論文の書き方



岩波新書

F 92

論文の書き方

清水幾太郎著

岩波新書



F
92



9784004150923



1920230009408

ISBN978-4-00-415092-3

C0230 ¥940E

定価(本体940円+税)



論文やリポートは、なかなか書けないものである。もとより「いかに考えるべきか」を離れて「いかに書くか」は存在しない。著者は当代一流の文章家。その文体の明晰暢達ひろく知られている。読者は、著者の多年にわたる執筆経験に即しながら、文章というものの秘密を教えられ、文章構成の基本的ルールを興味深く学ぶことができよう。

岩波新書から

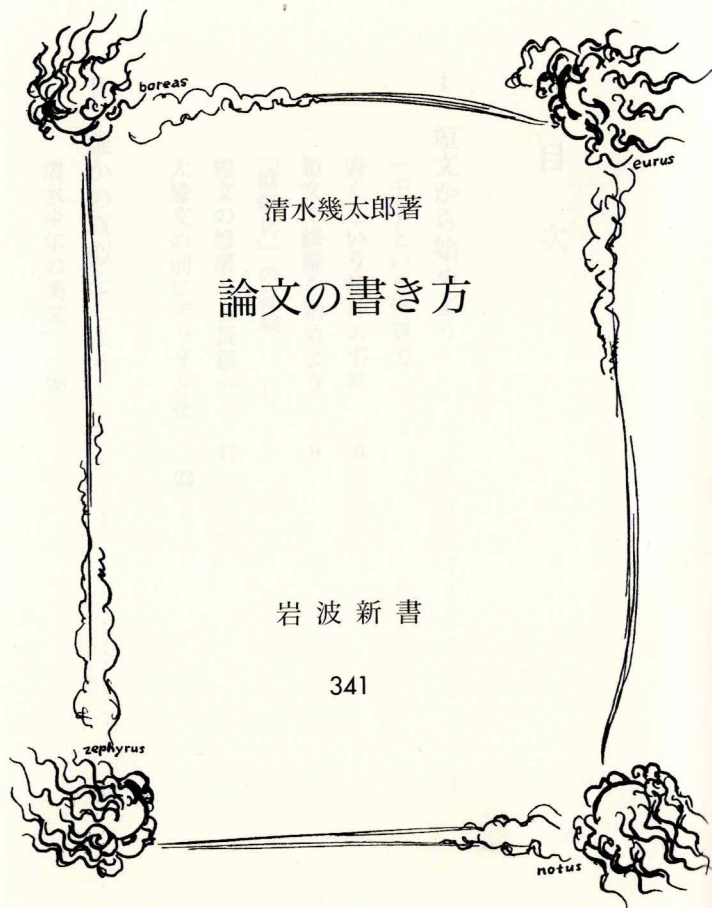
文章の書き方 辰濃和男著 328

日本語練習帳 大野 晋著 596

知的生産の技術 梅棹忠夫著 F 93

読書と社会科学 内田義彦著 黄 288

知的文章術入門 黒木登志夫著 1897



清水幾太郎著

論文の書き方

岩波新書

341

目次

I 短文から始めよう 1

一千字という世界で 2

書くという精神の姿勢 6

短文で修業を始めよう 9

「槍騎兵」の経験 12

短文の修業から長篇へ 17

大論文の前にデッサンを 23

II 誰かの真似をしよう 25

清水少年の美文 26

大家の文章を真似しよう 34

三木清の教訓 39

主語を大切にしよう 43

何を肯定し、何を否定するのか 45

新聞のスタイルを真似してはいけない 46

III 「が」を警戒しよう……………53

『社会と個人』の文体 54

「が」は小さい魔物である 56

新聞は「が」が多い 61

話すように書くな 65

社交という紐 71

書き言葉は孤独である 75

孤独から抜け出る道 77

IV 日本語を外国語として取扱おう……………83

書き始めの苦しみ 84

日本語を外国語の如く 87

言葉の意味をきめること 90

私たちは詩人ではない 94

母国語に甘えてはいけない 97

V 「あるがままに」書くことはやめよう……………103

「見た通り」の世界と「思った通り」の世界 104

文章は空間の時間化 107

書くのは私である 110

文章は「つくりもの」でよい 113

文章は建築物である 117

「無駄な穴填めの言葉」 119

「八百屋の隣りは魚屋で……」	122
「序論」と「結論」とは独立の小建築物だ	126
自分のスタイルが出来るということ	129

VI 裸一貫で攻めて行こう……………135

書くことは観念の爆発である	136
ゲーテは秘かに準備した	140
何処を自分は攻めているのか	144
引用についてのさまざまな問題	147
裸一貫になつて書こう	152

VII 経験と抽象との間を往復しよう……………161

大学の一、二年生と三、四年生	162
経験の言葉から抽象の言葉へ	165

明治初年の造語作業 168

後進国の運命 173

経験と抽象との間の往復交通 177

戦後の教育における享受と表現 183

VIII 新しい時代に文章を生かそう……………191

カーの講演の恐るべき密度 192

日本の講演の密度の低さ 195

主役が容易に現われない日本語 198

話し言葉における孤独 203

短くて強い文章を書こう 207

テレヴィジョンの挑戦 212

テレヴィジョン時代の文章 214

言論弾圧による文体の変化 216

仮名が多過ぎる文章

219

文章の本質を生かそう

221

結び 223

あとがき 227

I 短文から始めよう

約三十年間、私は文章を書いて暮して来た。従つて、文章を書くことについては、一千字といふ世界で

時代に一つの経験である。最初に、その話を書くことにしよう。それは、一番辛かつたと同時に、私の文章修業の上で一番役に立つたと思われるからである。

一九二八年、私は東京帝国大学文学部社会学科に入学した。二年生の時、私は、日本社会学会の機関誌である『社会学雑誌』に外国文献を紹介するという仕事を与えられた。この雑誌の巻末には「紹介と批評」という欄があつて、毎月、先生や先輩が執筆しており、私もこの仲間に加わることになったのであるが、私のような学生が執筆するというのは、いわば一つの異例であつた。しかし、私は、一九二三年の関東大震災の直後、中学の三年生の時、自分の一生を社会学に献げようとして以来、自分勝手の方法でガムシヤラに勉強して来ていたので、また、大学へ入つてからも幸いに成績が良かったので、先生たちはこの仕事を私に与えて下さつたのだと思う。私自身にしても、もう一人前の社会学者になつたような気持であつたから、この仕事を与えられた

ことを非常に光榮と感じていたのも事実であるが、その半面、いかにも当り前の成行のように感じていたのも事実である。とにかく、私は即座にこの仕事を引受けて、それから二、三年間、主としてドイツ社会学の文献を紹介することになった。それで、生まれて初めて、原稿料というもの貰うことになった。四百字詰原稿用紙一枚が七十銭ぐらいであつたと覚えてゐる。

ところが、いざ始めてみると、文献の紹介という仕事には一つの掟があつて、どんな文献でも、これを一千字即ち原稿用紙二枚半で紹介することになつてゐた。一口にドイツ社会学の文献といつても、数百頁の大著述もあれば、僅か数頁の雑誌論文もある。大小長短、原文は実にさまざまなのであるが、紹介は、それとは全く無関係に、一律に一千字ということに定められてゐた。先生や先輩の中には、大著述の目次と序文ぐらいに眼を通して、それで紹介を書いている人もあつたし、また、その方が要領よく書いたのかも知れない。しかし、学生である私としては、一つ、これを機会に勉強してやろう、という気持があつたので、原文が大著述であらうと、雑誌論文であらうと、ノートをとりながら、丹念に読んで行つた。

けれども、当然の話であるが、丹念に読んで行けば、読んで行くほど、重要な論点が次から次へと現われて来る。逸し難いと思われる個所が続々と殖えて行く。それは私の頭に充満し、ノ

トを埋めてしまう。読むだけなら、それでよい。しかし、読むことだけが私の仕事ではなく、私は紹介の文章を書かねばならないのである。さて、書くということになると、私に与えられているのは一千字という小さな世界である。私の頭に充満し、ノートを埋めているもの、それを千字の世界に盛り込まなければならぬ。読みながら一生懸命に拾い集めたものは山ほどあるのだが、一千字の世界に盛り込めるものは、百分の一か千分の一になつてしまう。いや、実を言うと、私がやっているのは、もう盛り込むという作業ではない。拾い集めた末に、獲物の殆んど全部を捨ててしまうという作業なのである。私は捨てなければならぬ。思い切つて捨てなければ、私は何も書くことは出来ない。よろしい、捨てよう。しかし、捨てるなら、最初、私は何を捨てたらよいのか。それから、次に、何を捨てたらよいのか。だが、捨てて、捨てて、捨て尽した後に、どうしても残るものがあるであろう。私はそれを書くよりほかはない。こうやって、私は千字の紹介を書いた。見方を少し変えれば、一生懸命に拾い集めたものを残らず投げ捨てて、捨てたものの中から、もう一遍、極く僅かなものを拾い出すということになるであろう。もちろん、初めに拾つた時は、それが重要と見えたからであるが、それを残らず投げ捨てた後で、そこから再び拾い直すという時は、単に重要というだけでなく、どうしても捨てられぬ、ギリギリの本質的

なものだけが拾い上げられることになる。こう書いて来ると、私は簡単に拾つたり、捨てたりしているようになるが、拾うのも大きな苦勞であつたし、まして、それを捨てるという決心はなかなかつかなかった。自分で捨てたというより、最後に、捨てざるを得ない地点へ追い込まれてしまったのである。

相手の文献は、その取扱つている問題はいろいろと異なつていても、一樣に学問的な内容のものであるから、私は勝手な読み方をするわけには行かない。それに、学生である私には、まだ勝手な読み方をするだけの自信がないから、勢い、非常に客観的に、というのか、出来るだけ著者の身になつて一語一語を辿つて行くことになる。自分というものを殺すことになる。そういう方法で、私は山のような知識を拾い集めたのだ。しかし、それを千字で書くとなると、つまり、拾つたものを捨てて、もう一遍、そこから新しく拾い直すとなると、もう著者の身になつてゐることは出来ない。客観的に振舞つては出来ない。今度は、書く人間の身になつて、即ち、私自身の身になつて、自分というものを強く生かして行かねばならない。私自身が主人にならねばならない。投げ捨てたものの中から最後に何かを拾い出すのは、この私なのである。私が積極的に活動しなければ、何が大本か、何が枝葉か、それが決定されないであろう。抽象という作用が行

われないであろう。

以上は、私が読む人間から書く人間へ変化して行つた過程である。私の精神が読む書くという働きから書く働きの移つて行つたコースである。もちろん、読むという働きは、聞精神の姿勢

くという働きなどに比べれば、多量のエネルギーを必要とする。しかし、書くという働きに必要なエネルギーは、読むという働きに必要なエネルギーを遥かに凌駕する。それに必要な精神的エネルギーの量から見ると、書く、読む、聞く……という順で次第に減つて行くようである。更に考えてみると、読む働きと書く働きの間には、必要とするエネルギーの大小というだけでなく、もつと質的な相違があると言わねばならない。そこには、精神の姿勢の相違がある。即ち、読むという働きがまだ受動的であるのに反して、書くという働きは完全に能動的である。同様に精神の働きではあるが、一方はかなりパッシヴであり、他方は極めてアクティヴである。特別の天才は別として、私たちは、多量の精神的エネルギーを放出しなければ、また、精神の戦闘的な姿勢がなければ、小さな文章でも書くことは出来ないのである。

これも天才は別であろうが、私たちの場合は、書くという働きを行つた後に、漸く読むという働きが完了することが多いようである。これに少し説明を加えよう。私たちが書物を読むのは、

言うまでもなく、それを理解するためであるし、實際、丁寧に読んで行けば、堅い内容の書物でも理解出来るものである。しかし、私だけの経験ではないと思うが、読んでいる間は、「なるほど」とか、「そうだ」とか、心の中で相槌を打ちながら、一々判つて行くけれども、また、読み終つた瞬間、一種の空気が心の中に残りはするけれども、肝腎の書物の内容は、輪郭の曖昧なもの、捕えどころのないものになつてしまう。日が経つにつれて、それさえ何処かへ蒸発してしまふ。糸が切れた風船のように、空へ消えてしまふ。書物に忠実な態度でノートをとつておけば、この点は少しは救われるが、それでも、永く風船を地上に繋ぎとめておくことは出来ない。私の経験では、風船を地上に繋ぎとめておく一つの方法、つまり、内容を自分の精神に刻みつけておく一つの方法は、読んで理解した内容を自分の手で表現するということである。読んだことを書くということである。何も、学生時代の私のように、一千字という無茶な枠を自分に与える必要はないし、書物の内容や分量も無視するわけには行かないが、原稿用紙五枚なり十枚なり——この枚数は最初から決めておいた方がよい。——に、読んだものを書くに限る。書く、といつてもノートのように、己れを空しうして、書物のままに、というのではなく、自分の精神を通して、自分自身が書くのである。自分が或る程度まで著者になるのである。精神の姿勢が能動的でなければ

ばいけない。精神の姿勢が能動的であるのには、原稿用紙の枚数があまり多くない方がよい。枚数は自由、いくら長く書いてもよいというのでは、精神は受動的であることが出来る。極端な場合は、当の書物をそのまま写し取って、その書物と同じ大きさのものが生まれるであろう。これに反して、枚数が小さく限られていると、否応なしに、読んだものの大部分を思い切って捨てなければならぬ。本質的なものを選び取らねばならぬ。枚数の制限というのは、精神をノンビリした受動性から苦しい能動性へ追い込むための人工的条件である。要するに、外国文献の紹介で私が経験した苦勞、或いは、これに似た苦勞を各人に経験して貰うことになるのだが、読むという働きより一段高い、書くという辛い働きを通して、読むという働きは漸く完了するのである。即ち、書物を読むのは、これを理解するためであるけれども、これを本当に理解するのには、それを自分で書かねばならない。自分で書いて初めて書物は身につく。

読む人間から書く人間へ変るといのは、言ってみれば、受動性から能動性へ人間が身を翻すことである。書こうと身構えた時、精神の緊張は急に大きくなる。この大きな緊張の中で、人間は書物に記されている対象の奥へ深く突き進むことが出来る。しかも、同時に、自分の精神の奥へ深く入って行くことが出来る。対象と精神とがそれぞれの深いところで触れ合う。書くことを

通して、私たちは本当に読むことが出来る。表現があつて初めて本当の理解がある。

短文で修業を始めよう

先生が外国文献の紹介という仕事を私に与えて下さった時、右のような事情に気づいておられたとも思われぬし、また、私がこの仕事を引受けた時、そんなことは想像してもいかなかったが、その後の私の文筆生活を反省してみると、この学生時代の経験が大きな修業になつていたと言わざるを得ない。当時の私と同じような条件を多くの人々に求めることは出来ないし、それに、誰でも私と同じようなタイプの人間とは限らないのであるから、私は自分の経験を頭から読者に押しつけようとは考えていない。しかし、自分の勉強に役立ちそうだと思われる、かなり堅い書物を選んで、それを丹念に読み、それから、短い紙数でその紹介を書くという方法は、広く初歩の人々に勧めることが出来ると信じている。既に述べた通り、第一に、この表現という迂路を通ることによって、私たちは本当に書物を読み、その内容を自分の精神に刻みつけることが出来るからである。そして、第二に、短文という苦しい狭い場所へ自分を押し込めることによって、文章を書くという仕事の基礎的作業を学び取ることが出来るからである。自由な感想を自由な長さで書くという方法は、あまり文章の修業には役立たない。

むしろ、初めは、こういう自由は捨てた方がよい。要するに、文章の修業は、書物という相手の

清水少年
の美文

『社会学雑誌』の「紹介と批評」という欄に書いた何篇かの文章は、今日でも私の手許に残っているが、それ以前の私の文章は殆んど何も残っていない。文章を書くのは小学生の当時から好きであつたから、いろいろと書いたものは多いのに、関東大震災でそれ以前のものは焼けてしまったし、その後のものも度重なる移転などで散佚してしまったのであろう。このように、『社会学雑誌』以前のものは、文字としては何一つ残っていないけれども、私の記憶の底を探てみると、一つ残っているものがある。小学校で命ぜられて書いた綴方の最後の一節である。一九一八年の秋、東京市日本橋区千代田小学校の五年生であつた私は、先生に引率されて、高尾山へ遠足に行つた。遠足の直後の綴方の時間に「高尾山」という題が出て、私たちはそれぞれ一篇の文章を書くことになった。私たちは飯田町駅から汽車で浅川駅へ行き、登山を済ませて、再び汽車で浅川駅から飯田町駅へ帰つた。私の綴方は、その日の夕方、浅川駅で汽車に乗るところで終つている。この最後の個所を、十一歳の少年は次のように書いた。

「……恰もよし、轟々、黒煙を吐いて来れる上り列車に投じて東京へ向ひぬ。」

あの日から四十年経っている。四十年の間、どうして私はこの一句を覚え続けて来たのであろうか。われながら調子よく書けたという得意の気持がもとで、この一句が二度と忘れられないように記憶に刻み込まれてしまったのであろう。そう考えるよりほかはないようである。しかし、幼い私が独力でこの一句を作り出したとも思われない。きっと、当時、何かの本でこの一句に出会つて、秘かに感心していたのであろう。「高尾山」を書いているうちに、それを思い出して、結びの一句に借用したのであろう。それで、「してやったり」という満足を感じたのに違いない。その満足が原因で、今日まで覚えているのだと思う。何も証拠は残っていないが、大体、こういう事情だったのであろう。

文章の修業が問題になるたびに、最近でも美文ということが話題になる。即ち、或る時代までは、美しい立派な文章というものの模範があつて、文章を書くものは、この模範に従つて書かねばならなかった。そういう時代はいつ終つたのか、正確なことは判らないが、私が少年の頃はもう美文時代は終つていたと思う。多くの先生は、「思つた通りに書け」、「見た通りに書け」と教えていてくれたのであるから、美文時代は過ぎていたと考えてよからう。しかし、思つた通りに書く、見た通りに書くといつても、それは簡単に出来ることではない。この点は後にも述べるが、

書くということになると、特別な方法で思い、特別な方法で見なければならぬ。そこで、綴方の好きな少年としては、自分で思ったこと、自分で見たことを中心に置きはするけれども、同時に、他人の文章から好ましい一句を借用するという結果になり易い。当時は、一方、美文時代は終わったものの、他方、思った通り、見た通りに書く技術がまだ完成していない——今も完成していないのかも知れぬ。——時代だったのである。この不幸な過渡期について考えてみよう。

1 「……恰もよし、轟々、黒煙を吐いて来れる上り列車に投じて東京へ向ひぬ。」この文章は文語体である。私は、この文章の以前も以後も、「……である」という口語体の文章だけでなく、「……なり」という文語体の文章を書いていた。この点でも、私は過渡期に立っていたらしい。専門家の研究に従うと、いわゆる言文一致の運動は、幕末から明治初年にかけて、少数の先覚者によって開始されて以来、幾つかの段階を踏み越えて今日に至っているもので、この過程を通じて、「……なり」という文語体は亡び、「……である」という口語体が勝利を占めて来た。第二次世界大戦後、「日本国憲法」が口語体で書かれたことは、文語体の絶対的敗北の、口語体の絶対的勝利の証拠であると見てよい。ところで、私が「……恰もよし、……」と書いた時期は、「口語体の完成期」と専門家が名づけている時代に属している。この時代に、島崎藤村、徳田秋声、

夏目漱石、森鷗外、谷崎潤一郎、武者小路実篤などの作家たちが文学の世界に口語体を確立したことが重要であるし、また、それに劣らず、新聞記事における口語体の確立が重要である。以前から、新聞記事は次第に口語体になって来ていたのに、格式ばった「社説」だけは依然として文語体を守っていた。ところが、この時期になると、「社説」も終に口語体に変わる。『東京日日新聞』は一九二一年一月一日から、『東京朝日新聞』は一九二二年一月一日から口語体の「社説」を掲げるようになった。こういう「口語体の完成期」に立ちながら、しかし、綴方の好きな少年は、調子の高い文語体に或る魅力を感じてもいたし、また、文語体を駆使し得る自分に誇りを感じていたのである。実際、あの綴方が文語体でなかったら、四十年後の今日まで私が覚えていたということはなかったであろう。第一に、文語体の持つ調子の高さ、そのために私は覚えていたことが出来たのだと思う。第二に、文語体を駆使することが出来るという誇り、そのために私はこの一句を秘かに反芻して来たのだと思う。

2 美文ということが問題になるたびに、「一瓢を携へて墨堤に遊ぶ」という話が出る。「一瓢」とは瓢箪のこと、それには酒が入っている。「墨堤」とは、東京を貫流する隅田川(墨田川)の土堤のことである。酒を持って隅田川へ花見に出かけるということである。こういうテ-

マについて美文の模範があり、文章の勉強というのは、この模範の真似をすることであつた。しかし、私の少年時代は、こうした美文全盛の時期は過ぎていた。過ぎてはいたが、気に入った一句を誰かの文章から借用するという方法は用いられていたのであらう。少くとも、私は用いていたのと思う。借用も真似である。模倣である。それは確かであるが、美文時代の模倣と、私の場合の模倣との間には、一つの差異がある。即ち、美文時代には、天下晴れての模範があつて、それをみんなが一斉に模倣したのではないか。それは社会的な事柄であつたのではないか。ところが、私の場合は、他人の文章といつても、誰も知らない人間の、有名でない文章から借用しているのであつて、私は自分でそれを探し出し、ひとりでコッソリ借用しているのだ。これは個人的な事柄である。公然にしろ、コッソリにしろ、模倣は模倣であつて、創造ではない、と言えは言えるけれども、二つの模倣の間の差異も見逃すべきではないであらう。過渡期はここにもあるようである。

3 「……恰もよし、……」とは、「都合よく」というほどの意味であつて、浅川駅で汽車を待つ必要がなかったということ、私たちが駅に着くと殆んど同時に汽車が入つて来たということを言い現わしている。しかし、あの日は本当にそうだったのか、と考えると、甚だ自信がない。こ

とによると、三十分も一時間も、浅川駅で上り列車を待つていたのかも知れないのである。今となつては、それを調べる方法もありはしないが、仮に私たちが三十分も一時間も汽車を待つていたとしても、私は平気で「……恰もよし、……」と書いたに違いない。これだけは言える。私の実際の経験より前に、気に入った一句があつたのであつて、気に入った一句の方が私の実際の経験に優先する力を持つている。自分の経験を犠牲にしても、形式の整った文章が出来ればよいのである。私にとつて大切なのは、立派な文章を書くことであつて、自分の小さな経験に拘泥することではない。自分の経験は、立派な文章が生まれるキツカケになればよい。大体、そういう気持であつたように思われる。こう考えて来ると、私の場合の模倣と美文時代の模倣との距離は、あまり買い被るわけには行かなくなる。幼い子供が、瓢箪に酒を入れて、お花見に出かける、というほどの現実無視ではないにしても、私の場合も、やはり、相当の現実無視と言わなければならないまい。

4 「……恰もよし、……」と私が書いたのは、第一次世界大戦が連合国側の勝利をもつて終つた頃のことである。そして、連合国側が民主主義——当時は民本主義と呼ばれていたようである。——を掲げていたこともあつて、戦後の日本は、民主主義の思想及び運動によって大きく揺

文章を書く時は、なるべく流行語を用いない方がよい。多くの流行語には、特殊な事情の下に立つ新聞というものの思想が浸み込んでいるからである。使う場合は、それを心得た上で使わねばならぬ。「ほほえましい」や「土性骨」のような流行語ばかりでなく、一般に、世間で好まれている言葉——それらは、氣が利いたように、洒落たように、スマートなように見える。——は警戒すべきである。といつても、世間に通用しにくい古語や新語がよいという意味ではなく、逆に、もつと平凡な、要素的な言葉を、しかし、鋭く使おうという意味である。一々の言葉をピカピカさせたり、それでビククリさせようとしたりするのはいけない。

新聞の文章は現代の美文である。その用語や表現には新聞独特の思想が浸み込んでいる。新聞の文章に一つの手がかりを求めるのは自然であると思うけれども、本当に文章を勉強しようとすると、過去の人々が美文の壁を突き破つたように、今は現代の美文の壁を突き破らなければならない。そして、それを突き破るのには、ステイヴンソンの修業の方法に立ち戻る必要がある。古くてもよい、新しくてもよい、或る思想家を自分で選んで、そのスタイルの模倣から出発すべきである。前に短文の練習について書いた時、私は、誰かの著作の紹介という方法を勧めておいた。これを真剣に行つていれば、やがて、模倣する価値のある著述家に出会うであろう。

III 「が」を警戒しよう

『社会と個人』
の文体

前に、三木清の文章におけるテンポの不足について書いた。そのために、三木清は私にとつてA先生であることが出来なかつたのである。しかし、テンポを尊重する筈の私が実を持つて廻つた文章を書いてゐた時期があるのだ。それは、前に触れた『社会と個人』上巻である。どういう風にモタモタしているのか。この書物の或る個所で、チャタートン・ヒルという学者の見解を要約しながら、私は次のように書いている。「……かくして現代に於ける社会と個人との対立又闘争は後者の優越を以つて特徴づけられてゐるのであるが、これは正しく人類文化の危機の表現でなければならない。このやうにして社会と個人との対立、矛盾、闘争は嘗つて原始社会に於いて見出されたのであるが、それは又現代社会にも見出されるものであり、原始時代と現代との間に介在する諸時代に於いても等しく認められるところである。……人間の社会は原始時代に於いても、古代又中世に於いても、近世又現代に於いても個人との対立関係の中に自己を立たせねばならないのであるが、これは過去及び現在に就いてのみ言はるべきことではなくて人類の遠い将来に亘つても同じ權利を以つて言はるべきことである。

……社会と個人との対立の詳細なる規定及び対立関係に於ける歴史的變化に就いては多くの社会学者がチャタートン・ヒルの意見を採用してゐるといふ訳ではないが、両者の間に横たはるとされる対立が歴史を貫くものであり、人間社会の存続する限りに於いてその存立を保証されてゐるものであるといふ見解に就いてはチャタートン・ヒルは一つの模範的なものを提供してゐる。

……」

こういう持つて廻つた調子になつてしまつたのは、第一には、大学を卒業したばかりの私が、生まれて初めて、六百数十枚という長篇を書くといふために、非常に堅くなつてゐたからである。第二に、この本の全体の内容が当時としては少し危険であるように思われたので、晦澁を恐れず、大いにアカデミックに書いてやろうと腹を決めていたからであらう。何れにしろ、ひどく持つて廻つた文体になつてしまつた。しかし、当時は一般に學術論文のスタイルが大変に堅かつたので、他人からはそう責められずに済んでゐた。ところが、近頃、この書物の改訂版が日本評論新社から出版されることになり、二十五年前の悪文に少し手を入れようと試みたところ、あまり困難とも予想せずに始めた仕事が忽ち行き詰つてしまつた。私が行き詰つた原因は、一見、非常に小さい事柄でありながら、実は非常に根本的な事柄なので、これについて書くことにしよう。

「が」は小さい
魔物である

既に読者が気づいているように、「社会と個人」では、相当に長い句が「が」という接続助詞で結びつけられている。「……特徴づけられてゐるのであるが、これは正しく……」……原始社会に於いて見出されたのであるが、それは又現代

社会にも……。」「……個人との対立関係の中に自己を立たせねばならないのであるが、これは過去及び現在に就いてのみ……。」「チャタートン・ヒルの意見を採用してゐるといふ訳ではないが、両者の間に横たはるとされる……。」「気になり始めると、この「が」は全く目触りである。見境もなく「が」を使っているために、書いた当の私は力んでゐるのに、文章の方は起伏に乏しい、平板なものになつてゐる。改訂するのなら、少し「が」を減らせよう。私はそう考え、これを実行し始めた。それが忽ち行き詰つてしまつたのである。一体、「が」を除いて、その代りに、今度はいかなる言葉を用いればよいのであらう。国語辞典や文法書で調べてみると、「が」は、「しかし」、「けれども」という意味であると説明してあるし、この程度のことなら、誰でも知っている。だが、「が」は本当に「しかし」や「けれども」であるのか。『社会と個人』のあらゆる頁、あらゆる行に見出される「が」は、「しかし」や「けれども」で置き換えることが出来るのか。即ち、「……が、……」の「が」を除いて、そこに句点を打ち、次の句を「しかし」や「けれども」

も」で始めることが出来るのか。もちろん、それが出来る個所もある。しかし、それが出来ない個所、それが無数にあるのである。というのは、「が」という小さい言葉には、「しかし」や「けれども」のほかに沢山の、殆んど無数の意味があるということである。

では、「が」は一般にどういう意味に用いられてゐるか。用途の全体を網羅することは思ひも寄らないが、若干の重要な用途を挙げてみると、第一に、「しかし」、「けれども」の意味がある。前の句と多少とも反対の句が後に続く場合である。反対の関係が非常に強い時は、「にも拘らず」の意味に使われる。第二に、前の句から導き出されるような句が後に続く場合に、「それゆえ」や「それから」の意味で用いられる。第三に、反対でもなく、因果関係でもなく、「そして」という程度の、ただ二つの句を繋ぐだけの、無色透明の使い方がある。このほかにも多くの用法があるけれども、差当つて、この三者だけを見ても、「が」の用途が甚だ広いこと、従つて、これが甚だ便利な言葉であることは判る。なぜなら、第一の用法では、前の句と後の句との反対関係が「が」で示され、第二の用法では、前の句と後の句との因果関係が「が」で示され、第三の用法では、前の句と後の句との単なる並列乃至無関係が「が」で示されているのであるから、「が」は一切の関係或は無関係を言い現わすことが出来るわけで、「が」で結びつけることの出来ない

二つの句を探し出すことの方が困難であろう。二つの句の関係がプラスであろうと、マイナスであろうと、ゼロであろうと、「が」は平然と通用する。「彼は大いに勉強したが、落第した。」とも書けるし、「彼は大いに勉強したが、合格した。」とも書けるのである。「が」という接続助詞は便利である。一つの「が」を持つていれば、どんな文章でも楽に書ける。しかし、私は、文章の勉強は、この重宝な「が」を警戒するところから始まるものと信じている。

「彼は大いに勉強したが、落第した。」という場合は、大いに勉強したという事実と、落第したという事実とが同時に指摘されている。「彼は大いに勉強したが、合格した。」という場合は、大いに勉強したという事実と、合格したという事実とが同時に指摘されている。最初の実感としては、それぞれ二つの事実が一度に眼前や心中に現われるに違いない。それが正直な気持というものである。そして、この二つの事実は「が」で結ばれて、そのまま表現されたのである。つまり、「が」は、こうした無規定的直接性をその通り表現するのに役立つのである。「が」で結ばれた二つの句も、これはこれで文章である。しかし、「が」をやめて、次のように表現してみたら、どうであろう。「彼は大いに勉強したのに、落第した。」「彼は大いに勉強したので、合格した。」こう書き換えると、「が」で繋いでいた時とは違って、二つの句の関係がクッキリと浮かび上つて

来る。「のに」——もつと強く言えば、「にも拘らず」——を使えば、大いに勉強したという事実と、落第したという事実とがただ一緒に現われるのではなく、ハッキリした反対の関係に立つことになり、こうなると、今度は、大いに勉強したという事実は少し怪しいのではないか、あの程度の勉強では不十分なのではないかという風に考えが進み始めるであろう。また、大いに勉強したという事実と、合格したという事実との間を「ので」——もつと強く言えば、「結果」——で繋げば、一つの因果関係が設定されることになり、運不運でなく、立派に勉強さえすれば合格するものだという考えへ導かれるであろう。こちらの考えが決まり、態度が決まってくる。「が」は無規定的直接性をそのまま表現するのに適している言葉である。無規定的直接性というのは、一種の抽象的な原始状態であつて、それはやがて、「のに」や「にも拘らず」、「ので」や「ゆえに」を初めとして、多くの具体的関係がそこから成長し分化して行く母胎である。しかし、この成長や分化は自然に行われるものではない。人間の精神が強く現実へ踏み込んで、その力で現実を成長させ、分化させるのである。人間の精神が受身の姿勢でいる間は、外部の事態にしろ、自分の気持にしろ、ただボンヤリと「が」で結ばれた諸部分から成り立っている。これらの諸部分の間に、「のに」や「にも拘らず」、「ので」や「ゆえに」を嵌め込むのには、精神が能動的姿勢にな

らなければ駄目である。精神が多くエネルギーを放出し、強く緊張しなければならぬ。本当に文章を書くというのは、無規定的直接性を克服すること、モヤモヤの原始状態を抜け出すことである。無規定的直接性という微温湯を抜け出すのは、決して楽な仕事ではない。そもそも、それは単に言葉の問題ではないのである。「が」は言葉の問題で済むかも知れないが、「が」の代りに、「のに」や「ので」を使うとなると、二つの事実をただ一緒に纏んではいられない。二つの事実の間の関係を十分に研究し認識していなければならない。研究や認識があつて初めて、私たちは「が」から「のに」や「ので」へ進み出ることが出来る。文章とは、認識である。行為である。私が自分の書いた『社会と個人』の改訂に手を着けて、この「が」を減らす仕事で行き詰つてしまったのは、二つの句或いは二つの事実の間の関係が十分に規定されていないまま漠然と「が」で繋がれていることが多かった結果である。言葉の問題でありながら、言葉を越えた問題がそこにあるのである。「が」に頼つていては、文章は書けない。

「が」に頼つていては、文章は書けない。思わず、私はそう言つてしまつたが、私の言い方は誤つてゐる。「文章は書けない。」と言ふべきではなく、「正しい文章は書けない。」とか、「立派な文章は書けない。」とか私は言うべきであつた。なぜなら、前に見たように、「が」は極めて便

利な接続助詞なのであつて、これを頻繁に使えば、誰でもあまり苦勞せずに文章が書けるからである。眼の前の様子も自分の気持ちも、これを、分析したり、また、分析された諸要素間に具体的関係を設定したりせずに、ただ眼に入るもの、心に浮かぶものを便利な「が」で繋いで行けば、それなりに滑かな表現が生まれるもので、無規定的直接性の本質であるチグハグも曖昧も表面に出ずに、いかにも筋道の通つてゐるような文章が書けるものである。なまじ、一步踏み込んで、分析をやつたり、「のに」や「ので」という関係を発見乃至設定しようとなると、苦しみが増すばかりで、シドロモドロになることが多い。踏み込まない方が、文章は楽に書ける。それだけに「が」の誘惑は常に私たちから離れないのである。

以前に比べると、近頃は半分減りはしたものの、それでも、新聞の文章には「が」が多い新聞は「が」が目立つて多い。この原稿を書いている机の横に、昨日の新聞がある。一九五八年

十二月三十日附の『毎日新聞』である。一面は、自民党の内紛、即ち、岸、大野、河野、川島などの主流派と、林、益谷、池田などの反主流派との間のイザコザで一杯になつてゐる。どうやら、主流派が折れて出たらしい。この一面を拾ひ読みしてみると、「……これに對し大野氏は人事刷新についてできるだけ早く行ふが、その時期は一月十日ごろになる見込みとのこ

とを述べたが、これに対しては……。「岸首相は反主流派三閣僚が辞表を提出した時は『ひ免』まで考慮したといわれたが、これでは岸政権の維持すらもむずかしくなろうとの心境になり、漸次反主流派の主張へ歩みよつてきた形だが、三十一日の大みそかをひかえて……。「岸首相は二十九日午前、年末恒例の記者会見をすることになっていたが、『現段階では……』と断つてしまった。怒った記者団はさつそく抗議書をつきつけたが、一方この日、いつもはおとなしい参院までが……首相もあつせんに動き出した松野参院議長顔を立ててか『……』とあつさり重大な譲歩をしたが、いまや周囲の情勢は……。」

思い切つてアカデミックに書いたつもり『社会と個人』が「が」の天下であつたのに、ジャーナリズムの代表者である新聞がまた「が」の天下なのである。以前はもつと「が」が多かつたように思う。新聞の文章に「が」が多いのには、幾つかの理由が考えられる。

1 「が」が短い言葉であることが大切であらう。「が」は一字であるから、これより短い言葉はない。「のに」、「ので」、「しかし」、「それゆえに」などを使えば、忽ち字数が二倍乃至五倍になる。新聞はスペースが限られていて、その限られたスペースに出来るだけ沢山の記事を盛り込もうというのであるから、「しかし」や「それゆえに」より「が」の方が都合にきまつている。

2 これを書く新聞記者は非常に忙しいのであるから、記者の身になつてみれば、他の言葉より、「が」の方が簡単に書けることが大切であらう。簡単に、と私が言うのには、二重の意味がある。即ち、一方では、「が」の方が物理的に簡単に書けるということであるが、他方では、心理的に簡単に書けるということである。即ち、多くの事実或いは句の間の関係を「しかし」と規定しようか、「それゆえに」と規定しようか、などと迷うのは大きな心理的負担である。何とでも結びつけてくれる「が」という万能選手がいるのであるから、これを起用するに限る、ということになるであらう。

3 これは、ニュース本位の客観主義とも関係があるようである。「のに」や「ので」というのは、前にも見たように、事実そのものの側から生まれて来るのではない。積極的な姿勢に転じた精神が自ら作り出して、これを現実の内部に嵌め込むのであつて、それで現実の或る構造が与えられるのである。これに反して、「が」であれば、人間の精神が作り出さなくても、現実そのものに備わつていと言え。これは、書く人間の影を宿さない。無色とも言える。深く踏み込むことを避けるニュース本位の新聞としては、こういう意味からも、「が」を好むのであらう。

4 お客である読者のために読み易くするというサーヴィスの気持も働いていると思う。「し

かし、「のに」、「ので」などはまだよいとしても、「それゆえに」や「それにも拘らず」などになると、読者の心へ滑かに入って行かない。ゴツンとぶつかる。これらの言葉は、ただ長いだけでなく、一語一語が読者に或る心構えを要求する。この種の言葉に出会うたびに、読者はそれに対応する心理的態度をとらねばならない。これと反対に、「が」の場合は、読者は特別の心理的態度を要求されない。或る一つの気持ちのままに次々に読み進むことが出来る。「が」の使用は読者に負担をかけないための配慮とも言える。

いろいろの理由で、新聞には「が」が多いのであろう。ところが、「が」に関係して、次のようなことがある。新聞記事を読んだ後で、私たちがその内容を思い出そうとすると、よほど刺激的な事件か、よほど熟知している事柄でない限り、これはまた実に骨が折れるものである。何一つ心に刻み込まれていない。読んだ後の話ばかりではなく、現に読んでいる時でも、スラスラと読めはするものの、ひとたび、書かれている事実をしつかりと理解しようとするや否や、大変に努力が要る。よほど緊張してかからないと、一句一句が逃げて行ってしまう。これは多くの人が経験していることであろう。こういう角度から見ると、新聞記事でない文章、即ち「が」がもつと少くて、その代り、「ので」や「それゆえに」、「のに」や「それにも拘らず」というゴツゴツ

した言葉を用いた文章の方が、後で記憶に残りもするし、読んでいる時も、一句一句が逃げない。滑らない。「が」で繋いだ文章はツルツルと読者の心へ入って来て、同時に、ツルツルと出て行ってしまうものらしい。しかし、これは当然の成行であって、「が」だけを使って書いたのでは、事件も問題も立体的な構造を持つことが出来ないのである。万事が曖昧な流れに融けてしまうのである。もつとも、「が」に出会うたびに、この「が」は「しかし」だ、この「が」は「それゆえに」だ、この「が」は「それにも拘らず」だ……という風に、その都度、読者が「が」の意味を規定していかねば、事情は少し変化して来るであらう。しかし、それには、先ず、書く方の新聞記者が同じ方法で一つの「が」に具体的な意味を与えていなければならぬ。そうでなければ、読者が後でいかに努力してみても、立体的な構造は生まれる筈がないであらう。だが、お互いに、そういう野暮な努力をしないで済ませられるというのが、「が」の便利なところなのである。

話すよう
に書くな

新聞が「が」を多く使うのは、読者へのサーヴィスであらう、と私が言った時、私は次のようなことも考えていた。日常、読者である私たちは専ら「が」を使って気安く会話しているという事実である。日常の会話では、「それゆえに」や「それにも拘らず」は殆んど現れない。「のに」や「ので」は日常の会話でも使われるが、実際は、「が」に近

よい。しかし、次のような場合はある。他人の見解に批判を加えるという時、批判される相手と交際関係がある場合である。現に、その相手と社交のチャンスがあり、今後も、このチャンスを失いたくないという場合である。けれども、これはそう困ったケースではない。相手の性格などを考えると、一概には言えないけれども、批判が相手の著作の真面目な研究と行き届いた叙述とによってシッカリと支えられていけばよい。むしろ、文章の上で曖昧な社交を行わずに、しかし、相手を傷つけることなく、相手が本当に承服するような立派な論文を書いたらよい。昔から、思想の発展も、学問の進歩も、こうしたやりとりが基礎になっていることが多いのである。

IV 日本語を外国語として取扱おう

書き始め
の苦しみ

何と言っても、書き始めが最大の難関である。いくら文章を書くのに慣れていても、この難関は変らない。全体で三十枚とか五十枚とか書く場合、最初の数枚が自分の気に入るように書ければ、大体、その後はスラスラと運んで行く。そうになると、私を包んでいた不安が急に消える。明るい気分になる。私の書いた言葉がまるで生きもののよう、自分で活動して行ってくれる。私は、言葉の自発的展開を妨げないように、その機嫌を損ねないように気をつけていればよい。さきほどまでの自分の緊張が嘘のように思われ、馬鹿らしく見えて来る。

これは、万事がうまく運んだ場合である。ところが、一旦、こじれると、一枚書いては破り、二枚書いては丸める。何度書き直しても、気に入らない。誰かに見せると、「申分ないではないか。」と言ってくれるが、他人が何と言おうと、自分の気に入らないのである。何処が気に入らないのかと尋ねられても、それが明らかでないのだ。そういう場合は、必ず、自分の書体やインキの色が妙に気にかかつて来る。どれも特に難かしい文字ではないのに、私の字は何と下手なの

だろう。今日はインキも特に不景気な色をしているではないか。そのうち、一枚目の五行目の「社会」という字さえ綺麗に書ければ、二枚目、三枚目と無事に進めるのだ、というような迷信も生まれて来る。アランは言う。「印刷所のために書かねばならぬ。」確かに、それに違いない。私たちの文字がどんな書体であろうと、インキの色がどうであろうと、印刷術の発明によって、そういう個性的なものはずべて意味を失ってしまった。それだけ、思想が人間の個性を離れて、普遍的且つ抽象的になったわけであるが、そうは言っても、文章の書き始めの段階では、とりわけ、スラスラと行かない時は、印刷所へ行けばゼロになる筈のものが実に気にかかる。前に挙げたドニ・ユイスマンも、能筆である必要はないが、一字一字キチンと書け、とか、薄い色のインキや派手な色のインキはやめた方がよい、とか、親切な注意を与えているが、書いては破ることを繰返している、という忠告では片づかぬ一種の病的状態に陥ってしまうものである。

時々、私もこういう病的状態に陥る。実を言うと、何十回も何百回も陥った経験があるので、この頃では、いざ書き始めるといふ時、「幾何学だぞ。」と自分に言い聞かせることがある。それは、こういう意味である。私が中学校で幾何学を習った時のことを考えると、最初に定義や公理が出て来て、それに定理が続いている。定義にしろ、公理にしろ、言わなくても判っているもの

のように思われ、それに続く定理も大した代物ではないように思われる。ところが、幾何学の授業があまり進まないうちは、これらの少数の定義、公理、定理だけが資本で、この僅かの資本で問題を解いて行かねばならぬ。私たちの手にある道具は極めて少い。私たちが立っているのは、身動き一つ出来ないような狭い場所である。そこを何とか動き廻らねばならない。全く窮屈である。しかし、ここが肝腎なのだ。この段階を乗り越えようと、いうのは、多くの定理を学ぶということだが、そうになると、今度は、沢山の定理が私たちの資本になる。問題を解くのに、いろいろの定理を自由に使うことが出来る。私たちは、漸く広い場所へ出て来たのだ。書き始めに当たって、「幾何学だぞ。」と私が自分に言い聞かせるのは、定義と公理と少数の定理としか与えられていない窮屈な世界へ入って行くのだ、という覚悟を堅めるための儀式のようなものである。最初の定義や公理は、平凡と言うなら、これほど平凡なものはない。判りきっていることを、もう一度、念を押したようなものである。だが、万が一にも、この段階で少しでも狂いがあつたら、私たちは一步も先へ進むことは出来ない。進んだつもりでいても、足元は直ぐ崩れてしまう。この段階での失敗は致命的と言つてよい。

一枚書いて破り、二枚書いて丸めているうちに、自分のみじめな書体が気になったり、インキの不景気な色に腹が立つたりして来る。それは神経質になり過ぎていたためだ、気のせいだ、とも言えるし、実際、そういうケースも多いとは思うが、しかし、落着いて考えようと、書体やインキの問題は定義や公理における狂い——小さな、しかし、致命的な——を告げる危険信号であることが多いのである。次に、これを別の方向から考えてみよう。

日本語を外
国語の如く
話し、日本語を書き、日本語で考えて来た。私たちにとつて、日本語は空気のよう

なもので、日本語が上手とか下手とかいうのさえ滑稽なほど、私たちはみな日本語の達人のつもりでいる。いや、そんなことを更めて考えないくらい、私たちは日本語に慣れ、日本語というものを意識していない。これは当たり前のことである。しかし、その日本語で文章を書くという時は、この日本語への慣れを捨てなければいけない。日本語というものが意識されないのでは駄目である。話したり、聞いたりしている間はそれでよいが、文章を書くという段になると、日本語をハッキリ客体として意識しなければいけない。自分と日本語との融合関係を脱出して、日本語を自分の外の客体として意識せねば、これを道具として文章を書くことは出来ない。文章を書くというには、日本語を外国語として取扱わなければいけない。

日本語を自分の外部の客体として掴むというチャンスは、普通は、私たちが外国語を勉強する時に訪れるものである。全く外国語と縁がなかったら、日本語が言語そのものということになり、日本語が日本語として自覚される折がないであろう。日本語の自覚が外国語との接触から起るということは、民族についても、個人についても、同様に言い得る。明治年代の初め、日本人が西洋と本格的に接触するようになってから、西洋諸国の国語との比較において、日本語が意識の新鮮な対象になり始めた。また、個々の日本人についても、英語などを学び始めると同時に、今まで慣れ親しんで来た日本語に向って新しい眼が開かれるようになる。

文章を書く時は、日本語も外国語として取扱ねばいけない、と私は言ったが、私たちは、外国語の勉強を通して、日本語を一種の外国語のように取扱う地点に立つことが出来るのである。言い換えれば、外国語の勉強は、日本語で文章を書く上に大きなプラスなのである。これが民族としての日本人の全体に当て嵌まるか否かは、専門家に尋ねてみないと判らないが、少くとも、私自身にとつて、これはよく当て嵌まる。普通の順序とは少し違って、私はドイツ語、フランス語、英語……という順序で外国語を勉強して来た。幸い、外国語の勉強は好きでもあり、専門の仕事の必要もあつて、私は永く外国語の本を読んで来た。もう随分慣れている筈である。しかし、

何年経つても、それが母国語との差異なのであるのか、サツと眼を通しただけでは、何も見当がつかない。眼へ飛び込んで来る感じというやうなものが全くない。日本語の本なら、パツと判る、というより、パツと判つたやうな気持ちになれる。外国語の場合は、特に以前はそうであつたし、今も不得意な外国語ほどひどいのだが、私は数式を解くのと同じ態度で読んでいる。外国文の一句が方程式のように見える、一語一語が数字のように見えて来る。訳語の判っている単語はよいが、判っていないものは、辞典で調べねばならぬ。判っているのは既知数で、判っていないのは未知数である。単語の意味が判つても、沢山の単語を結び合わせている関係となると、これは文法によつて解釈しなければならぬ。数式を解く場合も論理が働いているが、外国語の場合も論理が文法と一つになつて働いている。辞典と文法とを頼りにして、私は全く理づめの方法で外国語の文章を読んで行かねばならぬ。事実、私はこのような方法で読んで来た。

ここで、どうしても、若干の問題が現われる。外国人が日本語の文章を読む時は、やはり、数式を解くやうな態度になるものであろうか。日本人でも、日本語の文章を読み慣れていないと、数式を解くやうな調子になるものであろうか。漢字のやうな象形文字とアルファベットのやうな標音文字との違いが物を言っているものであろうか。しかし、今は、これらの問題に立ち入るより

V 「あるがままに」書くことはやめよう

「見た通り」の世界と
「思った通り」の世界

「あるがままに書く。」「正直に書く。」美文の型が力を失って以来、こ
う唱え続けられて来た。この言葉は、少年時代から今日に至るまで、私に
付きまとつていようである。多くの人々にとつても同じであらう。しか

し、「あるがままに……」と言われても、「正直に……」と言われても、ただこの態度だけで文章
が書けるものではない。表面は、この教訓は実行し易いように見えるけれども、実際は、むしろ、
自分の正直な経験を軽く見て、美文の型に自分を合わせてしまう方が楽に書けるのである。「あ
るがままに……」とか、「正直に……」とか命ぜられながら、手も足も出ずに、私は秘かにもが
いていたようである。この点は前にも触れておいた。

ところで、「あるがままに……」、「正直に……」という場合、当の事柄が眼に見える外部の世
界のことか、眼に見えぬ内部の世界のことかによつて、一方では、「見た通りに……」というこ
とになり、他方では、「思った通りに……」ということになる。それでは、見た通りの外部とは
何か。思った通りの内部とは何か。それを調べてみることにしよう。われながら、あまり気の利

いた表現とは考えないが、要するに、見た通りの世界も、思った通りの世界も、いろいろの事物
の空間的並存状態なのである。前に無規定的直接性と呼んだものを新しく言い換えたことになる。
もつとも、無規定的直接性の方は、事柄を人間の精神との関係で擷んだものであるのに対して、
空間的並存状態の方は、人間の精神から離れて、事柄それ自身に即して擷んだものという差異は
ある。

さて、眼に見える世界は、最初、空間的並存状態として現われるほかはない。例えば、今、私
がこの原稿を書いている部屋を見廻すと、執筆に使っているデスクがある。椅子がある。灰皿が
ある。電気スタンドがある。これは蛍光灯だ。大きな重い窓がある。ベッドがある。その他、実
にいろいろのものがあつて、到底、数え切れそうもない。あれもある。これもある。これらの全
体が一度に眼に入つて来る。これが、「見た通り」の世界である。この世界をただ見ているのな
ら、誠に天下泰平であるけれども、今は見ていることが仕事ではなく、これを書くというのが仕
事である。しかし、書くとなれば、天下泰平では済まない。なぜ済まないのか、と考える前に、
「思った通り」の心の世界というものを覗いてみよう。昔から、空間的規定は物質特有のもので、
心については空間的規定は当て嵌まらないという学説があるけれども、私が問題にしている事柄

についてなら、空間的規定を持ち出してよいと思う。先日来、私はこのホテルの一室で原稿を書いている。今の私には少し散歩したいという気持がある。部屋の中はスチームで温いが、戸外はひどく寒いであろう。風邪をひいては困る。背中がムズムズする。昨夜はもつと書いておけばよかった。寝るのが早過ぎたのだ。やはり、少し散歩したい。いや、お茶でも飲もうか。しかし、呼鈴を鳴らすのは面倒だ。その他、いろいろの気持が私の心に同居している。雑居している。あれも思い、これも思っている。これが、「思った通り」の心の世界である。これも、ただ思っている分には、何も問題は起らない。いつまでも思っていればよいであろう。だが、この世界を書くとなると、忽ち問題が発生する。

以前から、哲学の世界には直観という立派な言葉がある。これを直覚と呼んでいる人もあつて、その方が鋭い感じがするけれども、ここでは直観ということにしておこう。哲学史を読めば判る通り、直観は知識の最高の形式と見られている。それは、内外一切の真実を一挙に直接的に把握する働きと見られている。知識の問題を真面目に考える人間であれば、誰しも直観を憶れるにきまつている。一挙に、というのであるから、すべてのものを同時に全体的に掴むことになる。直接に、というから、何れは習練があつたにせよ、面倒な理窟など言わずに、人間が現実と一枚に

なるのである。こう考えれば、誰でも直観というものを憶れるであろう。しかし、哲学者たちの言葉を讀むと、直観は全く大したものであるが、しかし、現実には、こういう本物の直観はなかなか行われなかつたようである。あつたにしても、極めて稀であつたのであろう。哲学者自身が、実は、直観への憧れを語っていたのであろう。そして、現実に行われた限りの直観というのは、實際は、私のいう空間的並存状態に近いものであつて、「見た通り」の世界のこと、「思った通り」の世界のことであつたと思う。それが果して知識の最高形式か否かは怪しいが、とにかく、空間的並存状態においては、全体が、それはそれなりに、一挙に直接的に現われているとは言える。しかし、文章を書くことは、私たちがこの自然の状態にとどまつていたのでは不可能でもあり、また、不必要でもある。書くというのは、この直観を克服することである。

文章は空間
の時間化

直観においても、空間的並存状態においても、一挙に、と、直接的に、という点が重要であつた。ところが、文章を書く場合は、一挙というわけには行かず、また、直接的というわけには行かぬ。直接性の問題は以前にも述べたから、今は深入りし

ないが、画家が描いた花が実物の花に似ているのに対して、私たちが書く「花」という言葉は、どう見ても、実物の花に似てはいない。画家や彫刻家の仕事に比べて、散文家の仕事は甚だ抽象

的なものである。もともと、この抽象性が言葉というものの本質なのであって、——この抽象性のゆえに、逆に、言葉は、絵に描けないもの、形のないものを表現することが出来るという点に強みを持つている。——言葉を使う人間は、この本質を見極めていなければならぬ。誰でも知っている通り、有名なロゴスというギリシア語は、言葉という意味と、論理という意味とを有している。文章を書くものは、ロゴスと手を握ることになる。ロゴスは、言葉としては、今も言ったような抽象的なシンボルのことを、論理としては、物事の正しい筋道のことを言い現わしている。言葉を使う人間は、物事の筋道を辿らねば使えないし、物事の筋道を辿る人間は、否でも応でも言葉を使わねばならぬ。直接性というのは、一般に、言葉を使わないこと、論理にこだわらないこと、即ち、ロゴスと手を切ることである。これに反して、文章を書くというのは、ロゴスと堅く手を握るということ、即ち、言葉を使い、論理を重んずるということである。言葉を使い、論理を重んじなかつたら、何も書けないし、仮に書いたとしても、他人には理解出来ないであろう。そこで、一挙に、という点へ移ろう。この部屋の内面を見廻しても、私の心の内部を覗いても、確かに、いろいろのものが一度に見える。空間的並存状態である。しかし、それを一度に書くことは思いも寄らぬ。書くとなれば、一字一字、一語一語、一句一句、順々に書いて行かねばならぬ。

部屋の話なら、デスクのことから書き始めるとして、次に窓に移り、それから、……ということになるし、私の心の風景の話なら、散歩から書き始めて、ムズムズする背中へ進み、それから、それから……ということになる。つまり、或る長さの時間的過程を進んで行かねばならぬ。見れば一瞬のものも、書けば五時間、十時間、一日、十日、……どんなに長くかかるか判つたものではない。書くというのは、空間的並存状態にあるものを時間的継起状態へ移し入れることである。そこに雑然と並んでいるものを一つ一つの流れへ投ずることである。

話がここまで進むと、再び絵画との比較が必要になって来る。いや、絵画より前に写真のことに触れておこう。写真家は、ファインダーを通して、風景を一度に掴む。シャッターを押す。出来上った作品には、風景の全体が現われている。人々は、それを同じく一度に見る。こうして、写真の場合は、カメラを使う人にとっても、作品を見る人にとっても、風景の全体が一度に現われている。しかし、絵画は違う。画家は、風景にしろ、人物にしろ、写真家とは違って、一挙に描くことは出来ない。何処から描き始めるか、私はよく知らないが、何れにしろ、或る部分から一つ一つ描いて行くほかはないであろう。彼は長い時間的過程の中を動いて行かねばならぬ。写真家が「決定的瞬間」を捕えるのとは違う。しかし、長い時間をかけて絵が出来上ったとなると、

書くことは観念の爆発である

いよいよ、書き始めることになって、紙の上に最初の一字を書く。その瞬間までに、一体、どれだけの時間が流れたのか。もちろん、これは場合によつて異なる。書こうと腹を決めてから、その後の準備の期間を含めて、何年間も経つ

ていることがある。また、数カ月のこともあり、数日のこともある。数時間のことさえある。私が新聞の論説委員をしていた頃は、一篇三枚ばかりの「社説」であつたが、今日は自分が書かねばならぬと決定してから、原稿を書き上げるまでに、二時間半ぐらいの猶予が与えられていたと覚えている。長くても、短くても、準備期間が過ぎて、実際に書き始める瞬間が近づいて来ると、それが近づくに従つて、何とも言えぬ不安が押し寄せて来る。果して、うまく書けるだろうか。出来るだけの準備はしたつもりで、相当の自信があるというような場合でも、やはり、不安は不安である。絶対に勝つときまつた試合というものはない。イライラして来る。不機嫌になつて来る。誰かに話しかけられても、黙っている。何度もシャボンで手を洗つてみる。これなどは一種の儀式のようなもので、それで気持が少し落着くのである。大抵の人は何かの儀式をやる。

せきばらいの一つぐらゐは誰でもするであろう。とにかく、私などはひどく不安になり、不機嫌になつてしまう。

ところが、不思議なことに、私が不安になり、不機嫌になつて、ただイライラと黙っている期間に、私と同じように文章を書かねばならぬ立場の人が機嫌よく友人と話していることがある。誰かを相手に、理路整然、非常な説得力をもつて、しかも、正に書こうとしている問題について話している。そういう様子を見ると、つくづく羨ましくなる。けれども、ここで、もう一つの不思議が現われる。というのは、時として、この雄弁家がどうしても文章が書けないという例があるからである。あの雄弁をそのまま文字にすれば、たちどころに立派な文章が出来上ると思われるが、事実はそう簡単でないらしい。もつとも、人間である以上、巧拙の差はあるにしろ、誰でも身辺雑事の話は出来るものであるが、しかし、その人が文章を書くとなると、別の問題になる。こう考えれば、雄弁家が書けなくても、不思議はないけれども、しかし、正に書こうとしている当の問題についての雄弁と、この問題について書けないという事実との関係は、依然として一つの不思議であると言わねばならない。これについて、私は二つのことを考える。

1 誰かを相手に当の問題を話してしまつたために、話し言葉の法則が問題そのものを規定す

るようになったとも言えるであろう。前に見た通り、会話においては、話し言葉が沢山の協力者に取り囲まれ、むしろ、これと融け合つて働いているのであるが、文章においては、書き言葉が孤立無援、ひとりで何も彼も行わねばならぬ。会話なら、相手が領いてくれば、世話の焼ける証明の手続を省いて、そのまま次へ進むことが出来るけれども、文章では、さまざまな考え方を持つ不定限の相手に向つて、事柄を一言言葉によつて証明して行かねばならぬ。同じ言葉といつても、話すのと書くのとは言葉の機能が全く違つてゐる。しかし、それだけなら、まだ大したことではない。それよりも、会話で活潑に表現してしまふと、その問題の話し言葉による処理がいわば一つの溝になつて、精神がそこを流れて行くようになるという点が重要である。この溝を流れて行くことで問題は処理されるけれども、それは飽くまでも話し言葉による処理である。この溝を流れて行つたのでは、話すことは出来ても、書くことは出来ない。書くためには、精神がこの溝から抜け出なければならぬ。いや、この溝を壊さねばならない。しかし、精神の溝を破壊するのは、道端の溝を破壊するより困難である。

2 爆発は何度でも可能であるか、という問題がある。どんなに短い文章でも、これを書き上げるというのは、いろいろな観念が積み重ねられた揚句の一つの爆発である。この意味でも、文

章は一本勝負である。文章は一つの爆発である。だが、一貫した論旨で友人に話すというのも、これまた一つの爆発である。雄弁に且つ情熱をもつて話すという形式で一度爆発させてしまつた問題を、もう一度、文章という形式で爆発させようとしても、それはかなり無理であろう。どういう形式にしろ、爆発は一度しか起り得ないのが普通である。しかし、このことも無条件では言えない。なぜなら、話すという仕方での爆発は一度とは限らないからである。話すのには相手が必要が、相手は同一人物とは限らない。或る人は、友人Aに向つて話すことによつて観念の爆発を起した翌日、友人Bに向つて話すことによつて同じ爆発を起すことが出来る。それだけではなく、一回目より二回目の方が効果的な爆発であることが多い。相手が変れば、第三回、第四回……と爆発を繰返すことも可能である。だが、繰返えせば、繰返えすほど、話し言葉のスタイルが固定し、精神の溝が深く掘られてしまふ。そして、それだけに、文章による爆発の可能性が減つて来る。

これと反対に、書き言葉の場合は、以前に書いた文章と同じ内容の文章を書くことは非常に苦痛なものである。単純な清書というのであれば別だが、文章の上では二度目の爆発は不可能と考へた方が早いであろう。私のように、アクチュアルな問題について評論を書くことを一つの仕事

にしていると、この点で絶えず苦しまねばならない。例えば、日本の平和問題を一つ取り上げても、現実の条件の方はなかなか変化してくれない。従って、私は同じ主張を何度でも繰返さねばならなくなる。それは、現実の条件が変化しないために必要でもあるし、また、すべての読者が私のすべての評論を読んでいるのではないから必要でもあるのだが、同じ趣旨のことを二回目に書くとなると、私の方は全く気乗りがしない。なかなか爆発が起らない。それでも、何年間も同じ主張を続けて来てはいるものの、そのたびに、自分自身を無理にでも昂奮させるような、爆発を起り易くさせるような新しい角度を探すのに、おかしいほど骨を折らねばならない。話すという平面では何回かの爆発が起り得るが、書くという平面では本当の爆発は一回しかないを見た方が安全である。

文章を書くこうと思ったら、その問題について話すことは警戒せねばならぬ。かねがね、私はそう考えて来た。しかし、同時に、天才は違うであろう、と考えて来に準備した。

天才というのは、いろいろの表現方法を自由に駆使することの出来る人間で、話すことによって立派に表現することも出来るし、書くことによって立派に表現することが出来る、そればかりでなく、絵によっても表現することが出来る、そういう人間なのである。し

かし、沢山の表現手段、沢山の爆発方法を持たぬ私などは、書くこうとする限り、話すことについては慎重でなければならぬ。このように信じて来た。

しかし、天才の生活について幾らか知つてみると、天才は天才なりに、こういう問題ではひどく慎重であるらしい。そういう意味で、トーマス・マン（一八七五年—一九五五年）が一九三二年のゲーテ百年祭に当って試みた講演「著述家としてのゲーテの生涯」(Thomas Mann, Goethes Laufbahn als Schriftsteller)は面白かった。この講演は、一八三二年三月二十二日、ゲーテが書きながら死んで行つたという話から始まっている。最後の瞬間まで、ゲーテは自分の心中にあるものを精神的結晶に高めようと努力していた。書きながら死んだゲーテは、それでは、いかなるものとして生まれたのであるか。ゲーテ自身、こう語っている。「もともと、私は著述家として生まれた。何かを自分の考え通りに良く書いたという時ほど、私に純粹な喜びを与えるものはない。」ゲーテは書くために生まれ、書きながら死んで行つた。「書くというのは、癒し難い病気である。」そのゲーテが次のように言っている。「文学上のプランについて私が考えていることを誰かと話すとというのは、全く私の性質に反することであつた。何事もソツと私だけにしておいたので、それが出来上つてしまうまでは、一般に誰も感づかなかつた。」「何かを書くこうと思うのなら、決して誰

「註」にするという方法もあるが、「註」にしては問題が大き過ぎるし、捨てるにしても、未練があり過ぎる。しかし、こういう場合は、思い切って捨てるべきである。それも親骨を中心とするムーヴマンが前提されていることであるが、捨ててしまった方がサッパリする。その時は捨ててしまつて、他の機会に、その論点を真中に据えた別の論文を書くべきである。未練があると、大きなうねりが生まれない。

VII 経験と抽象との間を往復しよう

大学の二、三年生と三、四年生

或る大学の教師をしている若い友人がある。この友人は、専門は社会科学の方面であるが、学生に文章の勉強をさせねばならぬと考えて、一年に何回か、レポートを提出させている。先日、この友人から次のような話を聞いた。レポートは一

年生から四年生までの全部が提出するのだが、一、二年生のレポートと三、四年生のレポートとの間には、大変に大きな溝がある。個々の例について見れば、二年生から三年生へ進む時に必ずこの溝を乗り越える、という風に機械的に言い得ないこともあるけれども、全体として見れば、一、二年生というグループと三、四年生というグループとに分れるようである。一、二年生のレポートは、主として学生自身の経験を綿々と或いはダラダラと記述しているものが多い。こちらが学生の生活を前から知っていて、それに特別の関心を寄せているような場合を除くと、一般には甚だ退屈である。しかし、その退屈な文章を読んでいると、経験の或る断面について実に生々とした描写に出会うことがある。その他の部分が灰色の背景になって、或る断面だけがそこへ強く且つ鋭く浮かび上っている。もちろん、そうは言っても、生々した描写というのは極めて稀にしか見ら

れず、経験のダラダラした記述が大部分なのである。これと反対に、三、四年生になると、自分の経験の具体的な記述が急速に減ってしまい、その代りに、抽象的用語の使用が目立つて殖えて来る。その多くは学術的用語であるが、経験との結びつきが全く欠けた、或いは、結びつきが甚だ曖昧な抽象的用語が盛に使用され始める。むしろ、濫用され始める、と言うべきであろう。抽象的用語を用いる必要がないと思われる個所でも、学生は好んでこれを用いる。当然、こういうレポートはよそよそしい感じがする。読んでみても、何が内容なのか、それがなかなか掴めない。抽象的用語が多くなれば、レポートが、特定の人間の経験から離れて行く。長い間、学生のレポートを読んでみると、自分の経験をダラダラと書いていた学生が、或る時期に、抽象的用語の充満した文章へ移ってしまうということが判る。学生の数が多いので、どういう気持で、ひとりびとりの学生が一つの世界からもう一つの世界へ飛び移って行くのか、それを調べることは出来ないけれども、こういう風に飛び移って行くのは、一般には優れた学生の方であって、そうでない学生は、抽象的用語の世界へ入って行くことが出来ず、といって、自分の経験ばかりを書いていくわけにも行かず、それきり、文章が書けなくなってしまうようである。

この友人の話は、私に多くのことを教えてくれる。しかし、この問題を立ち入って考える前に、

別の友人から聞いた話を紹介しておこうと思う。別の友人は、子供の文章や子供のための読物を研究している人で、彼の話は次のようなものである。世界中で、文章を書くという点にかけては、日本の子供ほど恵まれた事情にあるものはない。アイウエオ……の五十音を知っていれば、どんなに幼い子供でも文章が書けるからである。「僕の部屋は小さい。」と書こうと思えば、「ボクノヘヤハチイサイ。」と書けばよい。「部屋」は「ヘヤ」で済む。しかし、西洋では、「ヘヤ」の代りに、「room」とか Zimmer とか chambre とか綴らねばならない。これは、日本の子供が「ヘヤ」と書くのより遥かに困難な仕事である。しかし、子供が大きくなると、そこへ漢字が入り込んで来る。アイウエオだけでなく、漢字も一緒に使って文章を書くという段になると、日本の子供は急に不幸な事情の下に立たせられる。夥しい漢字をどう使ったらよいのか。雄弁だった子供が俄かに黙り込んでしまう。

この友人は、西洋では幼い時は不利であったのに反して、長じてからは有利になる、と明瞭に述べてはいないけれども、そういう含みがあるように見える。しかし、日本の子供が幼い時は非常に有利な状況にいるが、やがて、ひどく不利な状況に立たされるというのは、この友人の言うように、漢字のせいであろうか。或いは、漢字のせいだけであろうか。私の考えでは、確かに漢

字が問題ではあるけれども、ただ漢字だけが問題ではないと思う。私の意見では、最も重要なのは、日本の抽象的用語が漢字で書かれているという点である。換言すれば、部屋とか書物とか道路とかいう、具体的事物を指示する漢字が日本人にとって重荷であることもあるが、それよりも概念とか構造とかいう、抽象的な事柄を指示する漢字が重荷であるということである。即ち、抽象的用語に関する困難が、漢字に関する困難と呼ばれるものの主要部分なのである。この友人の、漢字が現われると書けなくなる、という話は、前に挙げた友人の、優れた学生だけが経験の世界から抽象の世界へ飛び移ることが出来る、という話と結びついているように思われる。

経験の言葉から 抽象の言葉へ

外国の人間は、幼い時は日本人より不利だが、大きくなると、日本人より有利である、というところまでは友人も説きはしなかった。しかし、抽象的用語については、西洋の人間の方が私たちより遥かに有利であることは明らかである。というのは、日本人にとって、経験との結びつきを欠いた抽象的用語であるものも、外国人にとつては経験との結びつきを含んだ抽象的用語であるからである。抽象的用語は抽象的用語に相違ないとしても、日本における抽象的用語というものは、これはまた特別の抽象性を有している。例えば、「現実的」という言葉がある。しかし、こんな言葉は、今日まで、大部分の日本人が一

生を通じて一度も口にしなかったであろう。まして、書かなかったであろう。これを使うチャンスがないままで、多くの日本人は死んで行つた。今日は、事情が少し違つて来ているらしいが、それでも、幼い子供や田舎の老婆がそう気軽に使える言葉ではない。「現実的」はドイツ語の *wirklich* を訳したもの、少くとも、これに対応するものである。*wirklich?* というのは、「本当?」というような意味で、ドイツでは誰でも平気で頻繁に使う。それを名詞化した *Wirklichkeit* も、そう特別の言葉ではない。しかし、これを訳した、或いは、これに対応する日本語、即ち、「現実」や「現実性」になると、これに手を出すには、誰でも多少の勇気が要るであろう。

もう一つの例を挙げよう。最近、「疎外」という言葉が流行していて、何でも自分の氣に入らないものを「疎外」と名づけるようになっていいる。これは日本ばかりの現象ではないらしい。アメリカなどでも「疎外」という言葉が濫用されている。しかし、日本では、「現実」という言葉なら使う人でも、「疎外」となると、とても素直な氣持では使えないであろう。既に随分流行してはいるものの、こんな言葉は初めてだ、と思う人も多いであろう。元来、これはヘーゲルに始まり、フォイエルバハやマルクスによつて継承されたもので、ドイツ語の *Entfremdung* である。このドイツ語は、「本当?」という時の *wirklich* ほどポピュラーではないにしろ、言葉としては、

そう特殊なものではないようである。英語では *alienation*、フランス語では *alienation* であるが、これらの言葉は、「疎外」という意味に使用される以前から、譲渡とか狂気とかいう意味で使用されて来ている。*alien* という英語なら、日本の中学生も知っている。

「現実」や「疎外」という日本語がただ抽象の世界において使われるのに反し、これに対応する西洋語はただ抽象の世界において使われるばかりでなく、同時に、日常の経験の世界においても使われている。いや、同時に、言うべきではなく、初め日常の経験の世界で使われていて、それが後に抽象の世界で使われるようになったと言うべきである。順序が日本とは逆なのである。日本では、最初に抽象の世界の用語として輸入翻訳され、それが後に経験の世界へ持ち込まれ、そこで意味を砕いて使われ、私たちがこれに慣れるに従つて、いろいろな事物に広く適用されるようになり、時々濫用されるようになる。「現実」という言葉などは、既にこの普及の過程の中を動いているように見える。右のような事情を考えると、西洋諸国で定義というものに与えられている特別の重要性が自然に理解されて来る。言葉を使うものは、定義を重んずる必要がある、と私は前に説いた。「現実」や「疎外」という日本語に対応する西洋語が抽象の世界で使われる時、その以前から既に経験の世界で使われていたのであるから、経験の世界での意味の或る一部

カーの講演の
恐るべき密度

もう数年前になるが、私はカーの『新しい社会』(E. H. Carr: The New Society, 1951.)を訳したことがある。この本と同じ「岩波新書」の一冊として出版されているから、読んで下さった人も多いと思う。カーの著書は、フランス革命以後の歴史の流れの中で現代社会の諸問題を捕え、社会主義的自由の実現という方向に諸問題の解決を求めているものである、と言ってしまうと非常に簡単になるが、実に多方面に亘る著者の確実な知識が小冊子のうちに圧縮されて、一つの美しい結晶体になっている。私はカーの著作はいろいろと読んで来ているが、『新しい社会』は、その中でも傑作であると思う。また、私は読み慣れているので、そう難かしいとも感じなかったが、学生たちの読後感を聞いてみると、易しいように見えて、非常に難かしい本です、とか、気の休まる暇のない本です、とか、そういう返事であった。学生がこう感じたのは、カーの書物の恐るべき密度のゆえである。用語は決して独特のものや難解なものではなく、それに、私の訳文も或る程度まで流暢なつもりなのだが、この高い密度では、読む方してみれば、全く気の休まる暇がないと感じるであろう。読み落しが一語あっても、先

へ進んでから判らなくなる。それこそ、数式を解くように、時間をかけて読んで行かねばならぬ本である。

しかし、問題は、カーの『新しい社会』がラジオの講演であるところにあるのだ。これは、一九五一年の五月から六月にかけて、毎週一回ずつ、六週間に亘って、カーがイギリスのB・B・Cの第三放送で行った講演なのである。カーがマイクに向う時、どんな草稿を手持っていたか、それは判らないけれども、聴取者は、ただ耳で聞くよりほかはなかったのである。もつとも、放送された部分は、その都度、週刊の『ザ・リスナー』(The Listener)に載せられはしたが、いかに第三放送とはいえ、聴取者は少数の専門学者ではなく、大衆であつた筈である。内容が極度に圧縮されているから、ブヨブヨした経験には深入りせず、カーは抽象的観念を自由に用いている。哲学上の議論もかなり含まれている。一回分は、四百字詰の原稿用紙に翻訳すると、四十五枚見当になる。カー自身の講演は聞いたことがないけれども、私がヨーロッパでラジオの講演を聞いた経験からすると、一般にスピードは相当のものである。カーだけが特別に悠長な話し方をしたとは考えられぬ。つまり、このようなのである。日本人が大いに時間をかけて、書物の形でカーを読んでも、「気の休まる暇」がなく、なかなか理解して行けないのに、イギリスの聴取者はそれを

耳だけで聞いているということである。言うまでもないが、ラジオでは、聴取者はカーの表情に接することも出来ないし、黒板で文字や図形を見ることが出来ないし、カーに向つて質問することも出来ない。カーから聴取者へ向つて流れて行くものは、ただ彼の声だけである。この孤立した声が物凄い密度の内容を伝えている。そして、聴取者は、これをただ耳だけで受取っているのである。

『新しい社会』がラジオ講演であることを考えるたびに、私は陰気な敗北感に囚われてしまう。他の条件が同じであるとすれば、こういう知識の伝達に関する限り、日本人はイギリス人に完全に負けるであろう。日本語では、カーのような密度で講演することは全く思いも寄らないからである。これでは聴取者が理解しないであろうし、そもそも、その前に話す方がそんな無茶な勇氣を持つていない。カーのような密度の高いレヴェルでの、口頭による知識の伝達ということは、私たちの間では不可能なのである。私たちは、水をまぜた、低い密度の話しか出来ない。イギリス人が三十分間に伝達し受容し得る知識の量を一〇〇とすれば、私たちは同じ時間に三〇か五〇の知識しか伝達し受容することが出来ないであろう。

日本の講演の
密度の低さ

カーが私にとつて大きなショックであつたのは、私自身が幾度となく講演をした経験を持つていたためである。こういう堅い内容の講演であれば、日本では必然的にテンポがひどく落ちる。そして、必然的にテンポが落ちるところに、私たちの国語の特質が浮かび上つて来る。

カーは次のような調子で話している。「ですから、歴史といふものは、歴史家と彼が書き記す過去との相互作用の過程にほかなりません。事實は歴史家の心の形成を助けます。しかし、本質的に、歴史家の心も事實の形成を助けるものののです。歴史は、過去と現在との間の対話でありますが、さうは申しまでも、死んだ過去と生きた現在との間に交されるものでなく、生きた現在と、歴史家の手によつて息を吹き返し現在との連続性を持つに至つた過去との間に交されるものなのです。」これは先行の叙述を総括している個所であるから、何れかと言えば、「気の休まる暇」がある方であるが、私たちが日本でこういう話をする場合は、途中で何度も立ちどまつて、語句の繰返しをやらねばならない。また、「エー……」や「ウー……」や「あの……」や「その……」を夥しく挿入して、これによつて間を置き、一々の語句が、従つて、それが持ち運ぶ觀念が聴衆の心の底にコトリと落ちるのを見届けなければならない。所要時間は著しく長くなる。

しかし、実は、右のような、いわば量的な事柄では済まないことが多いのである。日本語には、耳で聞いただけでは判らない言葉が多いからである。一九三五年の頃であつたと思うが、当時、アメリカの行動主義の心理学を勉強し始めていた私は、或る人から、「近頃は何を御勉強ですか。」と尋ねられて、「行動」や「行動主義」について少し話したら、相手は「皇道」や「皇道主義」のつもりで聞いていて、やがて大笑いをしてしまったことがある。こうした誤解の上に立つて、とにかく、何分間かの会話が續いたのである。「科学」と「化学」、「工業」と「鉱業」、「創造」と「想像」、「公爵」と「侯爵」……例は限りなくある。そのたびに、「バケガク」や「ソウロウ(候)ノコウシヤク」などと見苦しい言い換えをやる。黒板があれば字を書く。なければ口頭で文字の説明をする。逆に、英語などに翻訳して、「……想像、つまり、イマジネーションのことですな……」と言ったりせねばならぬ。講演は、耳に訴える話し言葉の使用の上に成り立っている筈なのに、頻繁に文字即ち書き言葉の助力を求め、従つて、聴衆の眼に訴えねばならない。所要時間の延長は当然である。

ところが、一方では、書き言葉の助力を求めながら、他方では、話し言葉というより、会話のルールを尊重せねばならない。「理性」にしろ、「分析」にしろ、「警察国家」にしろ、文字に書

けば、そのまま書けるけれども、話し言葉として使うとなると、誰でも幾分か照れるものである。相手にとつて理解が困難であるらしいという場合は、「理性……まあ、知的な能力というようなことでしょうか……」などと注釈を施すことによつて、あまり照れないで済むが、そうでない場合、つまり、相手が真直ぐに理解してくれそうな時は、却つて余計に照れるようである。お互いに、うしろめたい気持ちになる。そこで、私たちが普通に用いる方法は、「理性」とキツパリ言い切らないで、「理性というようなもの……」、「理性とでも申しましょうか……」、「よく理性などと申すけれども……」という風に濁すのである。堅い言葉に包まれた乾いた観念を柔かくし、濡らせるのである。明晰が要求される肝腎のところ故意に曖昧にするのである。取消が可能であるような使い方をする。そうしなければ、言葉が強過ぎる感じがするのである。私たちは、こういう望ましくない方法で、経験との繋がりを回復しているつもりなのである。前に述べた、経験の世界と抽象の世界との間に横たわる溝を、話の途中で越えているのである。「……というようなもの」という言葉を、毎日、私たちは無数に使っている。所要時間はいよいよ長くなる。密度はいよいよ低くなる。

主役が容易に現
われない日本語

出揃つてしまふ。もつとも、ドイツ語は少し違つてゐる。シャーロック・ホームズ探偵は或る英文の手紙を見て、動詞が最後に置いてあるところから、それがドイツ人の手になることを看破する。「動詞をこんなに虐待して、最後に持つて来るのはドイツ人だ。」ドイツ語では、助動詞を使った場合や副文章の場合、*er hat……gelesen*、*ya……, dass er……gelesen hat* とうように、動詞が後の方に来る。慣れていないためであろが、私はドイツ人と話す時、最初に助動詞を使つてから、さあ、最後に来る動詞のことが氣になつて堪らない。よほど注意してないと、動詞を言い忘れてしまふ。また、動詞のことは覚えていても、何という動詞を使うつもりだつたか忘れている。また、動詞によつて、主語の次に来る助動詞が *sein* であつたり、*haben* であつたりするのだが、最後の動詞を喋る段階まで来ると、自分が *sein* と *haben* との何れを使つたかを忘れている始末である。実際、これには閉口する。

「私は……であります。」「彼は……と考へなかつた。」多くの外国語では、一番大切な単語即ち主語と動詞とが最初に現われて、それで話の中心というか、大筋というか、それが直ぐ判つてしまふのに、日本語では、主語が頻繁に省略される上、動詞は最後でなければ現われて来ない。その間、話を聞く方は中ぶらりんの状態にいる。何も決まらない、何処へ行くのか、否定なのか、肯定なのか、イライラしながら、待つていなければならぬ。堅い内容の講演を聞くのは、何処でも、誰でも疲れるものには相違あるまいが、こういう風に、日本では特に疲れる理由があるのである。それでも、前に見たように、会話なら条件がかなり有利であるけれども、一方的な講演を聞くというのは、一時間も二時間も、精神が不斷にこの未決定状態の中で緊張を強いられ、弄ばれることになる。その間、最後に動詞が現われるまで、それ以前に聞いた言葉を記憶していなければならぬ。これは非常に努力の要する仕事である。少しでも気が緩むと、動詞が現われる頃には、それ以前に聞いたことを忘れてゐる。雰囲気しか掴めない。しかし、忘れるのは聴衆ばかりではない。私の経験に照らしても、講演者自身が忘れてしまうのである。最初の主語が忘れられ、いつの間にか、別の主語或は主語らしいものが主役になつて、話がドンドン横道へ逸れて行く。聴衆も多くは忘れてゐるから、その場では不自然にならないけれども、後で速記を見ると、何を

あとがき

この小さい書物は、私自身の文筆生活の経験に反省を加え、そこから論文の基本的なルールの幾つかを導き出そうと試みたものである。真面目に文章の勉強をしている人々に少しでも役立つなら、私としては非常に仕合わせである。

本書で「論文」というのは、差当り、「知的散文」というほどの広い意味である。内容及び形式が知的であるような文章のことである。一方、それは、詩と関係がないのは自明のこととして、同じ散文でも、芸術的効果を狙ったもの、即ち、小説や随筆とは区別される。この区別は明瞭でなければいけないと思う。「芸術写真」という言葉が教えているように、曖昧なもの、思わせぶりのもの、深そうなもの……つまり、「知的散文」が正に避けねばならぬものが芸術の名で居直ってしまう例が多いからである。それと同時に、他方、本書でいう「論文」は、自然科学の諸分

野で書かれる「報告」の大部分を含んでいない。それゆえに、「論文」は、哲学、思想、文化、社会科学の方面における「知的散文」を中心とすることになる。

しかし、こうなると、当然、大学者の大論文が含まれて来てしまうが、本書の場合は、主として小学生の小論文を問題にする。即ち、大学の卒業論文やリポート、また、組合を初めとする各種の団体や運動の中で必要になる論文や報告、それから、種々の懸賞論文、講演や演説の草稿……こういうものを中心に置いてみる。私は、こうした仕事で苦勞している人々のことを絶えず考えながら、この本を書いて来た。

右に挙げた仕事は、長短の別はあるにしろ、猶予の期間がある。書物を読んだり、考えを練ったりする準備の時間がある。ところが、学年試験や入社試験で論文を書く場合は、待つたなしで、猶予の期間というものが存在しない。しかし、即席の論文が立派に書けるか否かは、猶予の期間が与えられている平常の仕事で十分に勉強しておいたか否かで決定されるものである。この意味で、待つたなしの論文のことは特に考慮しなかつたし、また、別の意味で、修士や博士の論文のような高級な問題も考えなかつた。

初め、私は、良い文章の例や悪い文章の例を豊富に挙げる事が出来ると思っていた。それが読者への親切であると信じていた。ところが、随分努力したが、結局、これは殆んど実行出来なかつた。それは、文章が思想と融け合っているためで、取扱っている問題の内部へ深入りしないで、ただ良い文章とか悪い文章とか言うことは出来ないからである。哲学の論文なら、それが取扱っている哲学上の問題そのものを正面から論じて行かなければ、その論文の文体を評価するわけには行かない。そういう事情で、到頭、文例は殆んど挙げる事が出来なかつた。これでも明らかなように、文章の勉強は、文章という形式的なものの勉強では済まないものであつて、哲学の問題にしろ、政治の問題にしろ、経済の問題にしろ、とにかく、そういう内容の勉強と一つのものでなければならぬ。文章を作るのは、思想を作ることであり、人間を作ることである。ニーチェは言っている。「文体の改善とは、思想の改善のことである。」(Den Stil verbessern heisst den Gedanken verbessern.)

現在は、学校教育の枠の中で文章の修業をするチャンスが非常に少い。私の時代は、綴方とか作文とかいう名称で、小学校、中学校、高等学校と、そのチャンスは与えられていたが、それで

清水幾太郎

1907-1988年

1931年東京大学文学部社会学科卒業

専攻—社会学

著書—『社会学講義』『社会心理学』『現代思想 上・下』『倫理学ノート』『愛国心』『オーギュスト・コント』『わが精神の放浪記 I・II』『わが人生の断片 上・下』ほか

訳書—E. H. カー『新しい社会』『歴史とは何か』

J. ティンベルヘン『新しい経済』

K. ボールディング『二十世紀の意味』

R. ハロッド『社会科学とは何か』ほか

論文の書き方

岩波新書(青版)341

1959年3月17日 第1刷発行
2015年2月13日 第94刷改版発行
2024年10月4日 第104刷発行

著者 しみずいくたろう
清水幾太郎

発行者 坂本政謙

発行所 株式会社 岩波書店

〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
案内 03-5210-4000 営業部 03-5210-4111
<https://www.iwanami.co.jp/>

新書編集部 03-5210-4054
<https://www.iwanami.co.jp/sin/>

印刷・理想社 カバー・半七印刷 製本・中永製本

© 清水真木 1959

ISBN 978-4-00-415092-3

Printed in Japan

も、本当に文章を書くとなると、学校教育の枠の外で、即ち、自分自身で修業しなければならなかった。この必要は、現在ほもつと殖えていると見てよいであろう。そのために、この書物のようなものが必要になっているのに違いない。

私は、自分の文筆生活の記憶を辿って、そこから論文を書く場合の若干のルールを導き出してみた。もちろん、これは、私のようなタイプの、私のような境遇の人間の場合であって、すべての読者に強制出来るとは思わない。しかし、「知的散文」のことを真面目に考えている人々に対しては、きっと、何処かで役立つであろう。私はそれを信じている。

一九五九年二月

清水幾太郎